

二〇一二(平成二十四)年度 日本文学科博士論文・修士論文・卒業論文題目一覧

博士論文

後期徳田秋聲文学の研究

—「自然主義文学」の超克

大木 志門

論介説話の研究

—日韓交流と女人像をめぐる

岩谷めぐみ

和田傳と中間小説

—昭和二〇年代から三〇年代の短編作品研究—

石橋 (剛)

永井龍男研究

—昭和期の文学状況及び雑誌文化との関わりから

乾 英治郎

放屁・性愛・病の絵巻研究

—中世日本の神話・文字・身体

吉橋さやか

『和英語林集成』の研究

—中世往生伝の形成と法然浄土教団

小川 豊生

泉鏡花論 到来する「魔」

—中世文学資料論

木村 一

谷山 俊英

種田和加子

博士論文中間報告書

近接関係を表す時間表現の研究

—江戸・明治・大正期の形態と意義を中心に—

渡邊 匡一

ハデイウトモ ドウイ アンゴロ

享保期における歌舞伎の発展

—二代目市川团十郎の日記をもとに—

複合辞に関する研究

—近代語における複合辞の意味用法を中心に—

ランディレクサ デインダ ガヤトリ

日本近代探偵小説論—(科学)と想像力の行方—

ビュールク・トールヴェ

説経の基礎的研究

福神物の研究

—異類としての神仏、お伽草子『隠れ里』を中心として

陳述副詞の史的研究

—初期大江健三郎論—『緊張』の文学

「猫の事務所」と「気のいい火山弾」における

非暴力思想—インドネシア中学生への品性・品格

教育教材として—

内田百閒—「非」幻想文学論

大通 伸彦

池田 健二

ロシタ

森村 彩夏

藤原定家の歌による本歌取の研究

菊地 将

中学校国語教科書における掲載作品の変遷

史とその考察—散文教材を中心に—

山下 太樹

谷崎潤一郎作品に於ける〈経済資本〉

高間 康広

吉屋信子が描いた「戦後」

松本 知珠

五味川純平『人間の條件』論

毛塚 優甫

箱根権現縁起の研究

大久保あづみ

日中古典文学比較研究

—『源氏物語』と『紅樓夢』を中心に—

『黒死館殺人事件』釈義

亀井勝一郎論

接続詞の研究

—「富士」の解体—太宰治「富嶽百景」をめぐる—

孟 一博

『源氏物語』の中国語訳

—豊子愷訳と林文月訳を中心に—

安部公房『失踪』小説論

山手樹一郎論—新・山手樹一郎著作年譜と研究史—

影山 亮

『伊勢物語』の章段構成および本文表記に

関する一考察 —惟喬親王二条后伊勢斎宮章

段群を題材として—

卒業論文

国木田独歩 「窮死」考

―「やりきれない死」の行方―

中島みゆきにみる言葉の力

―アルバム『愛していると云ってくれ』を中心に―

藤井 智大

宮下 大輝

文学に見る在日朝鮮人のアイデンティティ

―在日二世を中心に―

藤野峻太郎

「弟」で読み解く大江健三郎「犬の世界」

佐藤ゆかり

『唐糸草子』を読み解く

―祝福と抵抗の二重構造―

石井 聡

俵万智論―その言葉へのこだわり

三浦 英美

「冥婚説話を読む」

―『今昔物語集』を手がかりに―

金井 佑樹

『わかれ道』論―下層社会からみた「出世」

洪田 緑

三十一文字の宇宙（そら）の月

―古今／新古今 四季を旅して―

森 優

西行の月の歌・恋の歌

熊谷 萌

坂口安吾の個人主義

渡辺多加史

三島由紀夫『豊饒の海』 綾倉聡子の六十年

―二人だけの「罪」―

村田 祐美

語り手から見た六条御息所

―呼称表現を通して―

落谷 雄輝

安部公房『他人の顔』における人間存在の

探究

安尾 太一

崇徳院の和歌について

井内 彩香

日本人が楽しんだ『三国志』の形

―張飛の姿―

橘 侑里

『伊勢物語』―雅びの意義―

安納 知見

「口に出ませぬは察してくだされ」

―「十三夜」の夜は明けるか

測上 佳苗

八代集における秋の草花を詠んだ和歌の研究

染谷 望

川端康成 「死体紹介人」主題消失のわけ

―戯曲『Bok and Cox』との比較を中心に―

菅原 栞

和泉式部の多面性の追求

中川 瑠美